

フランスのリヨネ地方における

フランコプロヴァンス語の言語運動と言語意識

佐野彩

1 言語の危機・再活性化と「言語」の捉え方

世界の数多くの言語が消滅の危機に瀕していることに警鐘が鳴らされて久しい。言語の消滅には、政治的要因や経済的要因など、複数の要因が組み合わさっている。言語意識¹⁾もその一つであり、言語維持・シフト研究の初期の段階から研究対象に含まれていた (Fishman 1964)。また、否定的な言語意識は言語を「死」に至らせる主要な要因として、言語危機のモデルにも組み込まれてきた (Tsunoda [2005] 2006: 33-4)。一方、言語再活性化研究でも、言語の再活性化をめざすコミュニティに

おける言語イデオロギーを明らかにする重要性が指摘されている (Fishman 1991; Dauenhauer & Dauenhauer 1998 など)。

これはコミュニティ固有の信念・感情と、言語学者や政府役人といった外部の人によって持ち込まれた信念・感情の間の言語イデオロギーの争点を同定するものである (Kroskrity 2009)。特に着目したいのが、再活性化の目標や動機だけでなく、当該集団・個人がどのように自身や自文化・自言語を認識しているかということも重要とされる点である (Grenoble & Whaley 2006: 170-1)。

ところが、とりわけ国家や民族集団と結びつかないような少

数言語の場合、言語の出自や名称、明確な境界が話者に意識されることは少なく、言語が消滅の危機に瀕していることが認識され、維持・再活性化がめざされるときに初めてそれらが問われることになる。しかし、ある言語に名称を与えて境界を引き、それが話される領域と話者を他から区別することは政治性を帯びる問題である。ある言語に複数の呼称が存在し、「言語」の捉え方をめぐる言語運動内の対立が用いる呼称に表れることも稀ではない。自分たちが守ろうとする「一つの言語」の同定をめぐって困難な状況に直面するのである。

一方、一九九〇年代以降、先住民の権利や言語・文化多様性に対する意識が高まり、消滅の危機に瀕する言語を記録する必要性が言語学者や国際機関などによって強調されるようになった。それまで一つの言語として同定されてこなかったことばが言語学者によって調査・記述されて一つの数えられる言語となり、ヨーロッパを含む世界各地で数えられる言語の数が増加するという逆説的な現象が起きていることが指摘されている(佐野 2013: 153-68)。言語学的方法によって記述され、話者や言語が使われる文脈から切り離されたこれらの言語は、母語話者集団と結びつかない「文化遺産」として政府などによって保護されるようになり(佐野 2013: 164-7)、一方、話者(すでに母語話者ではない)も「文化遺産」となった言語のまわりに新た

なネットワークを形成し、復興活動に参画するようになった(佐野 2013: 172-3)。

本研究では、話者によって一つの言語として同定されてこなかったことばに対する言語意識が「文化遺産」としての言語の再活性化運動が行われるなかでどのように変化し、言語学的に切り取られた「一つの言語」が話者にどのように受け入れられているのかをフランスのリヨネ地方²におけるフランコプロヴァンス語 (franco-provençal) の事例をもとに考察する。

2 フランコプロヴァンス語の言語運動とリヨネ地方

2-1 フランコプロヴァンス語とその言語運動

フランコプロヴァンス語はフランス、イタリア、スイスにまたがる地域のロマンス系言語である(地図1および2)。一八七三年にイタリアの言語学者アスコリによって存在が指摘・命名され³、音韻的特徴によって隣接するオイル語(フランス語)とオック語(オクシタン語)から区別される。その言語境界は地理的境界や政治・行政的境界とは一致せず、フランコプロヴァンス語圏と一致する地域を支配した国家や民族集団もない。また、標準語や正書法がなく、存在するのは数多くの地域変種である。フランスでは、文化省にはフランスの諸言語の一

地図1 フランスの言語地図



※ Bert & Costa (2009) p. 13 の地図をもとに作成

つとされているものの、国民教育省には依然、地域語として認知されていない。一方、フランスのフランコプロヴァンス語圏の大部分は、「ローヌ・アルプ地域圏(二〇一五年現在)」という地方行政区分に含まれるが、二〇〇九年、オクシタン語とともに地域圏の地域語として認知された。

フランコプロヴァンス語は言語学者によって一つの言語として同定されたものの、「フランコプロヴァンス語」という言語の名称も存在も、フランコプロヴァンス語圏に暮らす人々の大

地図2 フランコプロヴァンス語圏



※ Bert & Costa (2009) p. 14 の地図をもとに作成

部分には知られておらず、村などの限られた地理的範囲のことばを指す「パトワ」と呼ばれてきた (Martin 1991)。「パトワ」は、「劣った田舎ことば」といった軽蔑的なコノテーションが特にフランスでは伴われる普通名詞である。自分たちが話している「パトワ」の出自や境界が話者にとって問題になることはなかったのである。

フランスではフランス革命期以降、中央集権的な言語政策によって地方の言語が抑圧された。フランコプロヴァンス語圏で

も、早い村では初等教育が普及した一八九〇年代以降、残りの

村でも第一次世界大戦が終結した一九一八年以降、子どもの第

一言語がフランス語に移行する (Tuaillon 1988: 201-2)。第二

次世界大戦後になると、フランスの地域語の復権は地域主義運

動と結びつきながら進んでいく。しかし、フランコプロヴァン

ス語圏では七〇年代になってようやく、イタリア、スイスと国

境を接するサヴォワ地方(地図2)のサヴォワとオート・サヴォ

ワ)で言語文化団体の活動や地域語教育運動が進展し始める。

七〇年代のサヴォワ地方ではリヨンを中心とするロヌス・アル

プ地域圏から分離してサヴォワ地域圏を創設し、政治的・経済

的自決を求める運動が高まっていた。そのなかで一八六〇年の

フランス併合までの歴史、国境を越える山岳地域の生活様式、

そして彼らの言語によって正当化されるサヴォワ地方のアイデ

ンティティが打ち出される。伝統文化の収集活動も始まり、言

語が失われつつあることに対する意識も高まっていた。ただ、

ここで問題になったのは、フランコプロヴァンス語圏の一部の

「サヴォワの言語」であり、「フランコプロヴァンス語」ではな

かった (Pivot 2014: 223-4)。そして、歴史・地理的になが

りが深く、国境を挟んで隣接するイタリア、スイスのフランコ

プロヴァンス語圏の言語団体との国境を越える交流も行われる

ようになる。これらの地域は概して話者が比較的多く、言語運

動の歴史も長い。

2-2 リヨネ地方の言語運動

一方、本研究が対象とするリヨネ地方(地図2)を含むその

他のフランスのフランコプロヴァンス語圏ではサヴォワ地方の

ような地域主義運動は見られず、言語運動の進展はさらに遅れ

る。リヨネ地方には強い地域的アイデンティティがなく、リヨ

ンとサンテチエヌという大都市に挟まれていることもあって

伝統文化も早くから失われた。しかし一九九〇年代になると、

いくつかの村でフランコプロヴァンス語のサークルが誕生する。

二〇〇三年には言語運動に携わる団体・個人の連盟「リヨネ地

方のフランコプロヴァンス語友の会 (Les Amis du Francopro-

vençal en Pays Lyonnais)」(以下AFPL)が設立され、フラ

ンコプロヴァンス語圏の他地方の運動との関係構築を図る。そ

して二〇〇七年にはフランス、イタリア、スイスの話者が一堂

に会する年一度の機会である国際フランコプロヴァンス語祭を

主催するなど、フランコプロヴァンス語の運動の表舞台に登場

していく。

リヨネ地方は伝統的に農畜産業がさかんな地域だが、一九五

〇、六〇年代に始まった農畜産業の近代化・機械化は、小規模

な農家によって伝統的な方法で営まれてきた農村社会を変動さ

せた。伝統的な農畜産業に関連する語彙の多くが土地の具体的な事物や現象と密接に結びつくフランコプロヴァンス語であっただけでなく、フランコプロヴァンス語はかつての農畜産業の現場の言語で、フランス語を第一言語とする世代が地域語を話し始める場でもあった。さらに伝統的な社会・暮らし全体が変化し、世代や家庭を越えて人々が集う場が減り、フランコプロヴァンス語が話される場も失われる。また六〇年代以降減少していた人口は、七〇年代後半になると再び増え始め (Maurly & Gilbert 2013)、外からの人口の流入がフランコプロヴァンス語話者の高齢化に加えて、その人口に対する割合を一層下げることになった。このような九〇年代以前から続く社会的変化を背景に、フランコプロヴァンス語が失われつつあることが意識されるようになり、言語団体の活動が始まる土壌が準備されたと言えよう。

九〇年代になると、フランスでは地域語・文化のイメージがポジティブなものになる (鶴巻 2002:196)。近代の価値・思考体系に対する異議申し立て、経済・社会変動に起因する危機、移動の増加等による共同体のアイデンティティの危機等を背景に、文化的な遺産がこれまでになく注目され、かつては日常の平凡なものであった事物や出来事、現象、場までが急速に遺産化され、象徴化されているという (Di Meo 2008)。また、前

述のように、これまで一つの言語とみなされてこなかった言語が「文化遺産」として保護されるようになった (佐野 2013)。リヨネ地方の言語運動の進展も、このような文脈のなかに位置づけられる。

2-3 リヨネ地方の人々の言語意識に関する先行研究

リヨネ地方の周辺に暮らす話者の言語意識を調査した Charpiigny (1987) によれば、「フランコプロヴァンス語」という名称は回答者のほぼ全員に知られておらず、「パトワ」は言語未満のことばとされ、後進性や (軽蔑的な意味での) 農民性と結びついていた。一方、過ぎ去った過去やその風俗、文化的遺産の価値が高まり、地域語の価値も高まる萌芽が見られたが、少数の教養層に限られていた。その後、リヨネ地方の一つの村に焦点を当てた Rivoire ([2003] 2007) では、「フランコプロヴァンス語」という名称も地域語の出自も依然として知られていないものの、村の歴史やアイデンティティの一部、あるいは地域の遺産として地域語の価値が高まっていることが明らかにされた。Bert & Longre (2007) によれば、二〇〇〇年代半ばを過ぎても、リヨネ地方を含むフランコプロヴァンス語圏西部の地域では「フランコプロヴァンス語」という名称も地理的範囲も話者にはほとんど知られていないが、地域語振興運動

の影響でごく一部の人々に広まりつつあり、村や地方よりも広い地域的共同体へのアイデンティティや帰属意識が生まれつつあることも示唆されている。しかしPivot (2014)では、ローヌ・アルプ地域圏がローカルな文脈から切り離された「フランコプロヴァンス語」を地域圏のアイデンティティの象徴・遺産にしようとしているのに対して、各地の言語団体が求めているのは依然、村レベルでの言語的遺産であることが指摘されている。

3 研究課題と方法

3-1 研究課題

以上を踏まえて本研究では、一つの言語として同定されてこなかったフランコプロヴァンス語の言語運動における言語意識の変化とその運動への影響について、リヨネ地方の言語運動に携わる人々を対象に考察する。取るに足らないことばとみなされてきた「パトワ」が「文化遺産」と捉えられるようになったことは、言語意識と運動にどのような影響を与えているのだろうか。また、「パトワ」が言語学的に同定された「フランコプロヴァンス語」という国境を越える一つの言語であることは、言語運動に携わる人々にどのように受容されているのだろうか。

具体的には、次の三つの観点から検討していく。第一に、フランコプロヴァンス語の衰退と言語運動の進展の背景にはどのような言語意識の変化があったのか。第二に、言語運動に携わる人々はなぜ活動に参加しているのか。なぜ彼らにとって言語は重要なのか。第三に、言語意識の変化は言語の再活性化にどのような影響を与えているのか。

3-2 方法とデータ

主にインタビュー調査によって得られたデータを質的に分析する。また、言語団体の活動の参与観察記録、言語団体のウェブサイトや刊行物等の資料、新聞記事等も参照する。

フィールドワークは、二〇一四年三月から九月および一五年三月に実施し、言語団体の活動の参与観察を行った。具体的には、言語団体の定例会(四回)・納会、AFP L総会、舞台公演、高齢者施設等での出張公演(二回)等である。またインタビュー調査は、二〇一二年三月および一四年五月から九月、一五年三月に、計三十六名に対して実施した。三十四名は言語団体の活動に参加している(いた)人である。団体の世代構成を反映してほとんどが六〇代から八〇代だが、三〇代、四〇代の協力者も各一名含まれている。また、残りの二名(五〇歳前後および三〇歳前後)は、フランコプロヴァンス語に関連する音

楽活動やイベントを行っている人物である。協力者には、周囲の大人が話すフランコプロヴァンス語を日常的に聞きながら育ち、理解することはできたが、大人になってから話し始めた後発的話者が多い。言語能力が限られる半話者もいる。リヨネ地方は伝統的にカトリックの信仰が厚く、政治的には保守的傾向が強い。フランコプロヴァンス語の話者と言語団体の会員は、代々リヨネ地方で暮らしてきた農畜産業関係者が多いとされる。ただし農畜産業以外の職業に従事している(いた)人、リヨネ地方の外に生活の拠点を置く人もおり、特に運動のリーダー的人物や若い世代に多い。

インタビューはフランス語による半構造化インタビューで、一対二を基本に、状況に応じて一対一あるいは同時に三人以上に対して行うこともあった。一回につき一時間から一時間半を目安としたが、場合によっては二時間以上に及んだ。具体的には、フランコプロヴァンス語の使用歴を尋ねた上で、①言語団体の活動への参加動機、②フランコプロヴァンス語に対するイメージや感情、価値観の変化、③言語境界意識とフランコプロヴァンス語圏への帰属意識、用いる言語の名称という観点からインタビューを行った。

4 リヨネ地方における言語運動に携わる人々の言語意識

4-1 社会言語学的状況の変遷と言語意識

リヨネ地方では両大戦間期を中心とする時代に、フランコプロヴァンス語が家庭で継承されなくなった。すでに学校での使用が禁止され、フランコプロヴァンス語を話すのは「恥」と捉えられるようになり、「良くないことば」という否定的な言語意識を子どもたちが持つようになっていた。また、地域語は軽蔑的な意味での農民性や後進性と結びついていた。そして彼らが親になると、自分の子どもにはフランス語で話すようになったのである。それでも大人の間ではフランコプロヴァンス語が話されていたが、一九六〇年代前後になると、フランコプロヴァンス語は決まった相手との私的領域での使用に限られるようになり、村ではほとんど聞かれなくなる。農村社会が変動するなか、フランコプロヴァンス語は消えていくもの、忘却しなればいけないものとみなされていた。

ところが九〇年代になって地域語のイメージが肯定化し、「文化遺産」と捉えられるようになると、リヨネ地方でもフランコプロヴァンス語が肯定的に見られるようになる。いくつかの村で「バトワ」のサークルが生まれ、概してフランコプロヴァ

ンス語の会話を楽しむために話者が集まっていた(Longre 2002:51)。二〇〇三年に前述の連盟組織 A F P L を設立することになる男性(七〇代、元高校教員、後発的話者)はしばらくリヨネ地方を離れていたが、九〇年代になっても言語が消滅していなかったことに驚き、自らの村で言語団体を立ち上げる。「話者であった」祖母と同じように、言語も死んだと思っていたが、人々がまだフランコプロヴァンス語を話しているのを聞いた。だから、団体を作ろうと思った。同時にあちこちで団体ができていた。つまりはそういう時代の風潮だった」と彼は語る。「社会が非人間的になるほど、人々は深いルーツにつながるようになる」(七〇代男性、元職人、後発的話者)、「以前は県やフランス、ヨーロッパという枠があったが、目印となる枠が失われた。[……]世界が広がり、境界がなくなっていくと、何かとても身近なものにつながる必要があるのだと思う」(四〇代男性、会社員、半話者)と語られるように、社会が変動するなかでルーツや身近なものへの価値が高まっていた。

4-2 言語団体への参加の動機と言語意識

では人々は具体的にどのような動機で言語団体の活動に参加しているのだろうか。なぜ彼らにとって言語が重要なのだろうか。彼らの活動への参加の動機は大きく二つに分けられる。

一つは、フランコプロヴァンス語を話すという娯楽であり、もう一つは娯楽に加えて、言語を継承するためである。

(1) 娯楽のための活動——言語への「愛着」

フランコプロヴァンス語は、過ぎ去った過去や子ども時代の思い出、両親をはじめとする話者と結びついている。「パトワは私のルーツ」(七〇代女性、元小学校教員、後発的話者)、「私たちが子どもだった頃のことば」(八〇歳前後女性、農畜産業、後発的話者)といったフランコプロヴァンス語に対する個人的で情緒的な「愛着」は、活動に参加している人の多くが共有している。

一方、彼らのなかには、フランコプロヴァンス語を話す楽しみや他の参加者とのソリダリティのために活動に参加するものの、言語の継承には消極的な人もいる。フランコプロヴァンス語は肯定的に捉えられるようになったが否定的な言語意識も残存しており、村には話せるのに話そうとしない人もいると指摘される。ある女性(七〇代、後発的話者)は、村で話したら「ほとんど気が変わったかと思われる」のでグループの外では話さないという。また、若い世代の無関心・無理解もしばしば指摘される。言語団体への参加は「余暇の活動だったが、子どもたちはそのようには見なかった。[……]私にとって何の役にも立たないと言いながら」と別の女性(七〇代、後発的話

者)は語る。否定的言語意識の残存や人々の無関心な態度は、自分たちにとっての情緒的価値以外に言語の価値を見出せず、言語の継承に消極的になることにつながっている。

(2) 言語の継承のための活動——「文化遺産」としての言語

自らの楽しみだけでなく、言語の継承もめざして活動に参加している人は、フランコプロヴァンス語に対する愛着に加えて、それが「文化遺産」であることをしばしば強調した。「文化遺産」としての言語を持つ、個人的な情緒的価値を超える象徴的価値が言語の継承をめざすことを正当化していると考えられる。フランコプロヴァンス語は「私にとっては遺産、私たちの遺産に含まれる。古い教会や家のようなもの」(七〇代男性、元職人、後発的話者)であり、「遺産とは、宗教的なものであれ、文化的なものであれ、何であれ、私たちのルーツである。『……』(フランコプロヴァンス語は)保護しなければいけない遺産」(七〇代男性、元工員、後発的話者)として受け継がれていくべきものとみなされる。

村の青年文化会館(MJC)の活動の一環として一九九七年頃、フランコプロヴァンス語のグループを立ち上げた男性(四〇代、会社員、半話者)は、当初は世代をつなぐ目的の娯乐的活動として始めたが、その後、言語の継承を真剣に考えるようになったという。また、別の村のグループを二〇〇六年に立ち

上げた男性(七〇代、元職人、後発的話者)も、当初はフランコプロヴァンス語を「聞いて、少し話すためだったのであって、言語を存続させ、残そうとするための団体を立ち上げることになるとは思っていなかった」と振り返る。フランコプロヴァンス語は継承に値するもの、継承すべきものになったのである。

言語団体には、活動に参加してフランコプロヴァンス語を話し始めた人や使う機会が増えた人、さらに言語を学んでいる人もおり、団体は言語再活性化に一定の役割を果たしている。しかし、フランコプロヴァンス語は言語団体の会員の間でも、挨拶や冗談などの短いやりとりでの象徴的使用に限られることが多い。言語の将来は悲観され、書かれたものや音声、映像などによって「痕跡」を残すことが現実的な継承としばしばみなされる。一方、伝統的な話者や言語が話されていた文脈から切り離された「文化遺産」として「痕跡」を継承する意義を疑問視する人は、継承に対して消極的になる。「聞いたことも話したこともないのに、いつかこれらの書かれた痕跡に興味を持つ人がいるだろうか」とある女性(七〇代、後発的話者)は疑問を投げかけた。

— 「バトワ」から「フランコプロヴァンス語」へ

「バトワ」が言語学者に認知された「フランコプロヴァンス語」という国境を越える「一つの言語」であったことは、地域語に対する言語意識を大きく変えた、とりわけ言語の継承のために活動している人は語る。

フランコプロヴァンス語が日常的に話される環境で育った人は、「バトワ」をフランス語と同様に日常のコミュニケーション手段として用いることができることばとみなしていた。しかし同時に、フランス語のような書きことばや文法がない不完全で、限られた地域で話されるにすぎないことばと考えていた。

ある男性（八〇代、農畜産業、後発的話者）は「私たちは「言語」とは思っていなかった。バトワは地元のものだった」と語る。

一方、フランコプロヴァンス語が日常的に話される環境で育っていない人は、土地のことばを「崩れたフランス語」（四〇代男性、会社員、半話者）などとみなしていたという。ある女性（七〇歳前後、元専門職、半話者、都市部出身）は「祖母が〔バトワを〕話したとき、〔バトワの〕単語を使ったとき、バトワであるとは知らなかった。〔……〕祖母や年配の女性が使う単語だと思っていた」と述べる。そのようなことばがフランス

語とは異なる言語であり、しかも国境を越える言語であったことは言語意識を大きく変えた。MJCのグループを立ち上げた前述の男性は「自分を別の次元に連れていった。最初は本当にバトワはローカルな小さなことばだと思っていた。〔……〕それが〔言語としての〕構造を備えた、とても古い歴史のあるものだったのだ」と語った。そして娯楽から真剣に継承に取り組むべき対象になったのである。

このように「バトワ」が「フランコプロヴァンス語」という一つの言語であったことは言語の価値を高め、「文化遺産化」とともに、言語が否定的に捉えられていた過去の文脈から切り離し、言語の継承を社会的にも、また自らに対しても正当化する後ろ盾となっている。

4-4 知識としての「フランコプロヴァンス語」と

「バトワ」意識の継続

しかし、「フランコプロヴァンス語」が知られるようになって、フランコプロヴァンス語圏への帰属意識は弱く、言語境界意識も一様ではない。リヨネ地方の人々が他の地方の話者と顔を合わせ、他の地域変種に触れる機会は概して、年一度の国際フランコプロヴァンス語祭に限られる。しかし、主な使用言語はフランス語である上、参加者が交流する時間も限られてい

る。祭りの期間、各地から集まった話者とのソリダリティは高まるものの、一時的なものであるという。

フランコプロヴァンス語は依然、概して「パトワ」と呼ばれる。同じ「パトワ」と捉えられている範囲は村からフランコプロヴァンス語圏全体まで様々であるが、リヨネ地方の周辺地域内の社会・文化的一体性がある程度意識されている範囲が挙げられることが多かった。

一方、「フランコプロヴァンス語」は学者の用語とみなされ、一部の人を除いて「パトワ」の言語的位置づけを示す際の使用などに留まる。「フランス(語)」と「プロヴァンス(語)」を組み合わせた折衷的名称は話者のアイデンティティとは結びつきにくい。ある男性(七〇代、元職人、後発的話者)は学校での出張授業で「フランコプロヴァンス語はパトワ、私たちのパトワです。私たちのことばで、私たちの先祖が話していたことばです」と強調するという。人々が情緒的つながりを持っているのは「パトワ」であり、「フランコプロヴァンス語」は「パトワ」の価値を高めるために戦略的に用いられていると言える。「フランコプロヴァンス語」は言語運動が進展するなかで外部から入ってきた専門的知識である。言語運動に携わる人々の知識体系に一定の変容をもたらし、知識としては受容されたが、自分たちの言語とみなされているのは「パトワ」であり、概し

て「パトワ」話者意識が継続していると言える。

5 考察

話者には「一つの言語」とみなされてこなかったフランコプロヴァンス語に対する言語意識は、言語運動が進展するなかでどのように変化したのだろうか。地域語の「文化遺産化」と「フランコプロヴァンス語」という言語の名称と概念の普及は、言語運動に携わる人々の言語意識と言語の再活性化にどのような影響を与えているのだろうか。

フランコプロヴァンス語は、農村の後進的な「パトワ」とみなされ、忘却されるべきものとされてきたが、一九九〇年代に地域語が「文化遺産」として社会的に肯定的に捉えられるようになる、地域的アイデンティティが弱く、地域主義運動も見られなかったリヨネ地方でも言語運動が進展し始めた。人々はフランコプロヴァンス語を話す娯楽のために、あるいは娯楽に加えて言語を継承するために活動に参加している。言語に対する情緒的で個人的な「愛着」に加えて、後者の場合には「文化遺産」としての象徴的価値が言語に与えられることで、保護するに値するものと捉えられていた。一方、単に「村のパトワ」と捉えられていた地域語が「フランコプロヴァンス語」という

国境を越えて話される「言語」であったことも、取るに足らないことばから守るべきことばへと言語意識を転換させた。「文化遺産」としての象徴的価値と「フランコプロヴァンス語」という「一つの言語」としての地位は、言語の継承の重要性を社会的にも、また自らに対しても正当化する後ろ盾となっている。

しかし、言語運動の進展と言語意識の変化にもかかわらず、フランコプロヴァンス語の衰退は進んでおり、文字や音声、映像によって「痕跡」を残すことが現実的な継承であると考える人が多い。それは、日常のコミュニケーションで用いられている動的な言語から、記録として固定化され、「文化遺産」として象徴的価値を与えられた言語になることを意味する。しかし、伝統的な話者や言語が話されていた文脈から切り離された形での言語の継承に価値を見出せない人はそのような形での継承は望まず、言語運動内部で言語の継承・再活性化に対する態度に溝が生まれている。

また「フランコプロヴァンス語」という一つの言語の存在は知識として知られ、言語運動の支えになっているものの、自分たちの言語として愛着があり、継承が望まれているのは、概して村や地方の「パトワ」である。歴史・社会的文脈から切り離

されて「一つの言語」とされた「フランコプロヴァンス語」の社会的受容の難しさが表れていると言えよう。

社会的潮流の変化と言語運動の進展のなかで、一つの言語として同定されてこなかった言語が「文化遺産」そして「一つの言語」とみなされるようになり、話者の言語意識が変化したことは、言語を再び話すようになるという意味での再活性化は依然として厳しいものの、言語運動を進展させる要因であることを本研究の事例は示している。しかし、運動に携わる人々の言語意識は一枚岩ではなく、言語意識の差異を検討することで言語運動にマイナスに働き得る要因も見えてきたことは、言語再活性化研究における言語意識調査の重要性を裏付けるものである。

なお、本研究のインタビュール協力者は「村のパトワ」の後発的話者を中心である。フランコプロヴァンス語圏には地域語を本などで学習し、地方や国の境界を越えて活動している若い世代の運動家もいる。異なる歴史・社会的文脈に置かれているフランコプロヴァンス語圏の他の地方との比較、異なる世代・活動形態の運動家間の比較については稿を改めて論じたい。

(1) 言語意識は、言語や言語行動に対する何らかの評価的反応と定義され、言語や言語行動に対する感覚的・感受的反応・意見・信念、評価の結果の現れとしての行動が含まれる(真田ほか1992:114)。

(2) リヨネ地方 (Yonnais) は本研究では、リヨネ山地を中心に、後述のA D P L傘下の言語団体が所在する範囲を指すこととする。リヨネ山地は、東西に約二十、南北に約三十キロメートルに広がるなだらかな山地である。

(3) アスコリがフランコプロヴァンス語の存在を指摘したのはイタリアの政治的統一後でもない時期で、オーストリア領だった南チロルやトリエステなどのイタリアへの「回収」がめざされており、フランスに併合されたサヴォワ(フランコプロヴァンス語圏に含まれる)もその対象となった(長谷川2002:27-8)。ただし、アスコリによる国境を越える言語の存在の指摘がどの程度、政治的意図と結びついていたかについては別に検討する必要がある。

参考文献

Bert, M. & J. Costa. 2009. "Etude FORA: francoprovençal et occitan en Rhone-Alpes".

Bert, M. & C. Longre. 2007. "Le décalage entre la dynamique de promotion du francoprovençal et le conservatisme de ses expressions culturelles: indice de déclin ou phase annonciatrice d'un renouveau?". C. Alen Garabato & H. Boyer dir., *Les langues de France au XXI^e siècle: vitalité sociolinguistique et dynamiques culturelles*. Paris: L'Harmattan, 41-50.

Charpigny, F., 1987, "Entre l'usage et la conscience: quelques questions, quelques réflexions à propos du discours sur les parlers en

Rhone-Alpes". *Situation linguistique actuelle du Lyonnais: échanges réciproques entre dialecte et français et conscience linguistique des habitants*. Lyon: Institut Pierre Gardette, 149-206.

Dauenhauer, N. M. & R. Dauenhauer. 1998. "Technical, Emotional, and Ideological Issues in Reversing Language Shift: Examples from Southeast Alaska". L. A. Grenoble & L. J. Whaley eds., *Endangered Languages*. Cambridge: Cambridge University Press, 57-98.

Di Méo, G., 2008, "Processus de patrimonialisation et construction des territoires". Colloque "Patrimoine et industrie en Poitou-Cha-

- rentes: connaître pour valoriser". <https://halshs.archives-ouvertes.fr/halshs-00281934/> (二〇一五年一〇月三日最終閲覧)
- Fishman, J. A., 1964, "Language Maintenance and Language Shift as a Field of Inquiry: A Definition of the Field and Suggestions for its Further Development", *Linguistics*, 9: 32-70.
- , 1991, *Reversing Language Shift: Theoretical and Empirical Foundations of Assistance to Threatened Languages*, Clevedon: Multilingual Matters.
- Grenoble, L. A. & L. J. Whaley, 2006, *Saving Languages: An Introduction to Language Revitalization*, Cambridge: New York: Cambridge University Press.
- 長谷川秀樹 二〇〇二『ロルミカの形成と変容——共和主義フランスの多文化主義モーション』三二六頁。
- Kroskrity, P. V., 2009, "Language Renewal as Sites of Language Ideological Struggle: The Need for "Ideological Clarification"", J. Reyhner & L. Lockard eds. *Indigenous Language Revitalization: Encouragement, Guidance & Lessons Learned*, Flagstaff: Northern Arizona University, 71-83.
- Longre, C., 2002, "Une nouvelle association est née: les Amis du Francoprovençal en Pays Lyonnais", *L'Arvine*, 131: 51-8.
- Martin, J.-B., 1991, "Nommer la langue pour les linguistes et les locuteurs: l'exemple du francoprovençal", J.-C. Bouvier dir. *Les Français et leurs langues*. Aix-en-Provence: Publications de l'Université de Provence (Aix-Marseille I), 495-501.
- Maurry, S. & A. Gilbert, 2013, "Les Monts du Lyonnais, un territoire rural en équilibre entre Lyon et Saint-Etienne". <http://www.insee.fr/fr/themes/document.asp?ref_id=20167> (二〇一五年一〇月三日最終閲覧)
- Pivot, B., 2014, "Revitalisation de langues postvernaclulaires: le francoprovençal en Rhône-Alpes et le rama au Nicaragua", Thèse de Doctorat, Université Lumière Lyon 2.
- Rivoire, L., [2003] 2007, *L'Arbopin*, Lyon: Sup Copy.
- 真田信治・渋谷勝己・陣内正敏・杉戸清樹 一九九二『社会言語学』第4号。
- 佐野直子 二〇一三『言語を『文化遺産』として保護するということ』赤嶺淳編『グローバル社会を歩く——かかわりの人間文化学』新泉社 一四六—一九九。
- Tsunoda, T., [2005] 2006, *Language Endangerment and Language Revitalization*, Berlin: New York: Mouton de Gruyter.
- 鶴巻泉子 二〇〇二『九〇年代のフルタートニタ再生——グローバルなイメージ戦略としてのマーケティング地域主義と言語』言語文化論集』二四(一): 一八九—二〇七。
- Tuaillon, G., 1988, "Le franco-provençal: langue oubliée.", G. Vermes dir. *Vingt-cinq communautés linguistiques de la France*, t.1, Paris: L'Harmattan, 188-207.

付記

本研究は、JSPSの科研費(特別研究員奨励費、課題番号226070)の助成を受けた研究成果の一部である。

(40) S おや／博士後期課程)